

## 大 学 図 書 館 問 題 研 究 会 京 都

〒607 京都市山科区大宅山田町34  
(Tel) 075-574-4118京都橋女子大学図書館 小林倫道気付  
(Fax) 075-574-4124

## 大空と大地の中で一大図研全国大会に参加して

後藤 慶太

## 1. 思わぬ誘い

あれは8月9日(金)の12時少し前のことだったと思う。堤美智子さん(京大総合人間学部図書館閲覧掛)から不意に電話があった。珍しいこともあるもんだ、おおかた、また附属図書館の本がこちらに返却されていたのでよろしく、ということだろうと勝手に解釈しながら同僚の蒲彰子さんから受話器を受け取った。あとから考えたら、そんなこと言うためにいちいちご指名されるわけないんやけど。

「もしもし。こんにちわ」

「ああ後藤さん、あの一、一緒に北海道行きませんか？」

「(?) えっ!？」

(……うーん、どういうことだろう? 急にそんなこと言われてもなあ。いつも親しく接していただいているとはいえ、それはまずいよなあ。旦那さんにもずいぶんお世話になってるしなあ。それに俺もまだ独身やしなあ。どうしようかなあ……) などと考えていたら

「北海道で大図研の全国大会があるんですよ」

と堤さん。私の心配は杞憂に終わった。

全国大会については、以前、柴田正子さん(京大法学部図書室整理掛)から聞いたことを思い出した。そういえば、北海道や言うてはったなあ。

「仕事の予定とか見てからお返事します」

と言って電話を切った。しかし私の心はこの時すでに北の大地に翔んでいた。目の前に広がるカニ、ウニ、イクラ、ラーメン……。電話がかかってきた時間がまずかった。私は腹が減っていた。北海道で何があるかなんてことはどうでもよかった。私の頭の中には北海道へ行くことのみがインプットされた。

## 2. 札幌にて

そんなわけで、突然訪れた初めての北海道行きの機会だった。新千歳空港からJRに乗り換えて札幌へ。車窓から見える風景は、やはり雪国らしい急勾配のトタン屋根、そして広々とした大地。列車を降りると、涼しくてさわやかな空気が身を包む。それに比べて京都の暑さはどうだ。

大会が始まるまでだいぶ時間があつたので(これが実はとんでもない勘違いだった)道立近代美術館と道立三岸好太郎美術館を回ることにした。この方面にはほとんど疎いのでコメントは差し控えるが、見がいはあつた。興味のある方はどうぞ。それよりも札幌の街並

の美しいこと。京都のように碁盤目状に作られているが、非常に整然と、そしてさっぱりとしていて好感が持てる。また日曜日でも繁華街は比較的閑散としていた。今回がたまたまそうだったのかもしれない。が、休日の四条なんてまったく出かける気にならないのに対して、札幌はゆったりと買い物を楽しめそうだ。でも札幌の人達って普段どこへ行っているんだろう？繁華街といえここでは何と言っても「ススキノ」が有名。ススキノにごく近い郷土料理店へ食事に行った時に少しだけ見て回る機会があったが、私の想像していたのとは違った。どういうことか具体的に言うのは少々はばかりがあるので割愛する。

この郷土料理店を出たあと、「千秋庵」という洋菓子店に入った。そこで食べたアーモンドパフェのおいしかったこと。この時、北海道のアイスクリームをはじめとする乳製品はやはり一味違うということを確認し、滞在中ずっとソフトクリームやら何やら食べ続けていた。北海道は、私のように甘いもの（特に洋風の）が好きな人にはたまらないところだと思う。きっと酒や酒の肴もうまいのであろうから、飲んべえにもたまらないところだろうけど。食べ物のことと言えば、さっぽろラーメンを食べれなかったことが心残りである。一応、この辺では一番おいしいよ、と教えられた北大の生協食堂のラーメンを食べたことは食べたのだが、それは確かにおいしかった。だが、ほかに食べていないので比較のしようがない。まずい店はとことんまずいらしいが、それでも食事は周りの雰囲気も大切な要素である。多少まずくても、「あー、さっぽろラーメン食った！」という感じがする店で食べたかった。

札幌ではまた北海道大学の附属図書館を見学する機会をも得た。これは北大附属図書館の長井伸一さんをお願いして実現したもので、とても懇切丁寧に館内の案内をしていただいた。長井さんのおかげで、まだ展示準備中の北方資料室の貴重な資料を実見することができた。それにしても、話には聞いていたが北大のキャンパスはとてつもなく広い。無味乾燥なコンクリートの建物や壊れそうな建物がせせこましく立ち並ぶ京大にいと、自然公園のような北大の余裕をうらやましく思う。

### 3. 小樽にて

小樽というと、父親が以前カラオケでレパートリーにしていた「小樽の女」という歌をすぐ思い出す。それに加えて、よくテレビで中継される倉庫群くらいしかこの街のイメージはなかったのだが（いくらかの電気代で小樽はうまい観光スポットを作り上げたものである。昼間見たらただの汚い倉庫に過ぎないのに）、今回札幌よりも深い印象を持った。小ぢんまりとまとまっていてアンティークな雰囲気があること、悲惨な最期を遂げた小林多喜二の出身地であることと今見ているこの街ののどかさや素朴さとのギャップ、北方に開かれた港町であって、古くから、そして今もロシアの影響が強いこと（街角の案内板も日本語、英語に加え、ロシア語の説明が書いてある。ロシア人もいっぱい歩いているし、ペテルブルグ美術館なんてのもある。この美術館は二重丸のお薦め）等からの印象だろうか。

また食べ物の話になって恐縮だが、小樽に来てようやくウニ・イクラ丼を食べることができた。やはり新鮮な素材が一番である。

小樽がガラス製品のメッカだとは知らなかったのも、数ある工房の中でも一番有名らしい「北一硝子店」に観光客が殺到していた光景には圧倒された。きれいだとは思いますが、ガラスの価値というものがもうひとつよくわからないので、ここの製品はちょっとばかり高いと私には感じられた。

ほかにお薦めできる所に、小樽が一望できる旭展望台がある。ただしここにたどり着く

までには長く急な坂（いわく地獄坂）を登っていかねばならない。脚に自信のない人は車を使ったほうがいい。また、旭展望台の近くにある小樽商科大学附属図書館からもすばらしい眺めが見える。こんないい環境の所で勉強ができる学生がうらやましい（もちろん、仕事の合間にこの光景を眺めて気分転換できる図書館員も）。

小樽では、寒河江瑛子さんにひとかたならぬお世話になった。

#### 4. 旅の終わりに

このたびの札幌・小樽行きは私に多くの感銘を与える旅となった。いずれ必ずや再訪するであろう。ありがとう北海道。

というところで終わるつもりでいたのだが、あらためて読んでみると、大会のことを何も書いていないことに気付いたので、最後に感想めいたものを少しだけ述べて、つたない稿を閉じたいと思う。

初日、とんでもない勘違いから全体会に遅れて行った。加えて、早起きして来たのも手伝って、途中で何度もウトウトとしてしまった。何度目かに正気に戻った時、いつの間にか、図書館員の専門（職）性の議論が始まっており、俄然白熱の度を増していた。まさか全体会の場でこの話題が議論されるなんて思っても見なかったから、意表を突かれたのと同時に発言する人たちの情熱、迫りに圧倒されるものがあった。

これは分科会に移っても同じで（ちなみに私は専門性の問題と夜間・休日開館の問題の分科会に出た）、忙しい実務の間によくもこれだけ勉強できるもんだ、と心底感心した。勉強する時間がなくて、ちっともプロと呼べるような知識も技術も身に付かん、と普段から鬱々たる気持ちでいる私は、結局自分が甘いだけなのだという反省をせざるを得なかった。それにしても、本当に図書館員っていう人種はまじめで、自分たちの仕事を真正面から見据えているんだなあ。こんなに一生懸命やっているのに、実際報われていないのは何でなんだろう？専門性の話をとってみても、その理想的な姿が議論され、盛り上がっていかばいくほど逆に一挙にむなしくなってしまうのは、つつい現実の姿と引き比べてしまうからなんだろうなあ。どうしたらこういう所での議論が力を持って、貧困なる文化行政・図書館行政を変えていけるんだろう？

参加者は、現役図書館員はもちろんのこと、退職した人や夜間のアルバイト、他職種に異動になってしまった元図書館員など種々雑多な人たちで、これが大図研の幅広さ、深さになっているのだろうけど、逆に意見のまとまりにくさの要因にもなっているんじゃないだろうか。特に、国立大学と私立大学とでは、とても同じテーブルの上では議論が進まないと思えて仕方がなかった。他人のことをとやかく言うのは気が引けるが、私大は人材を無駄遣いしているというのが私の印象だ（おそらく経営者は効率的に使っているんだと言うのだろうけど）。優れた人材が大勢いるはずなのに、なかなか図書館にい続けられない現状。その気になれば私大の方が国立よりもずっと強力なスタッフを揃え、ずっとユニークで積極的な図書館サービスが展開できるだろうに。

これほど図書館が好きで、図書館員であることに誇りを持っている人たちが日本には大勢いることがわかって、それが今回の一番の収穫だったろうか。図書館の役割の重要性が強調される一方、定員削減など弱体化するような政策ばかりとられている現実。私には何ら明るい未来を展望できるものはない。ただ私もこの仕事が好きだ。図書館員を斜陽産業にしたいはない、と思う。（終）

〔付記〕文章中でご登場いただいた方々には何の断りもなく実名を使ってしまうました。加えて、まったく事実に基づかないフィクションの部分もあることを告白するとともに併せてお詫びします。（ごとう・けいた／京都大学附属図書館情報サービス課資料運用掛）

## 新連載 (4回シリーズ)

パソコン通信入門講座

## 最終回 「パソコン通信の楽しみ方」

小林 倫道

いよいよ最終回。最大の会員数を誇り、豊富なメニューでも群を抜く NIFTY-Serve (ニフティ・サーブ) を中心に、パソコン通信の世界を覗いてみましょう。といっても紙面、及び私の文筆表現に限りがありますので、細かい操作等は前回紹介したようなマニュアル本や雑誌を参照して下さい。

操作は、最近のソフトではマウス対応になっているものが増えていますが、基本はコマンド (キーボードで打つ命令) による通信が基本ですので、サービス内容やコマンドを網羅している『NIFTY-Serve イエローページ』 (ナツメ社) 等の「虎の巻」を 1冊持っておくといざという時便利でしょう。

## (1) 電子メール

パソ通機能の第一は何といっても電子メールです。練習の第一歩は自分宛てにメールを出すことです。接続した状態で文章を打っている間は間尺に合わないので、あらかじめワープロやエディター (簡易ワープロ) で手紙の全文を作っておいて、それを転送するようにしましょう (ファイルの転送方法は通信ソフトによって異なります)。慣れたら複数同時送信、FAX出力にも挑戦してみましょう。

TO:ABC12345

SUB:こんにちわ (あいさつ、用件)

(本文) ※1行36文字程度が無難  
行末には改行マークを

/POST

左のような文書原版を作っておき、相手に応じてIDを書き替えて送信文書を作成するようにすれば便利です。TO:~/POSTで宛先指定から送信確認までのキー操作を自動化できるので、タイプミス防止にもなります。

ABC12345 が相手のID。複数同時に出す時は最大10個まで可。

TO:ABC12345, EFG67890, HIJ13579

のようにコンマでつなぐか、1行ひとつを複数行続けます。

TO:F075-123-4567 のように (F+FAX番号) 指定すれば相手のFAXにプリントで出すことができます (複数の場合はコンマ連結は不可)。相手側がインターネットでもちゃんとメールのやり取りができます。

TO:INET:xyw1234@abcde.or.jp

でOK。xyw1234@~ がインターネットのメール・アドレスです。インターネット側からNIFTY-Serve宛に送ってもらう場合は、

ABC12345@niftyserve.or.jp

というように指定してもらいます。ABC12345 がNIFTYのIDです。インターネットがらみの場合は、英数の大文字小文字に注意しましょう (打ち間違えるとうまく送れません)。

## (2) フォーラム

フォーラムは様々なジャンルをテーマにしたオンライン上のサークルのようなもの。その数は数百種にもものぼりますから、必ずあなたの興味をそそるフォーラムが見つかる筈で

す。画面上で簡単に入会手続きができ、利用料金も接続基本料金以外にはかかりません。入会しなくても一部の機能は開放されていますから、まずためしに覗いてみましょう。

フォーラムのメイン機能には電子会議室、掲示板、データライブラリ等があります。電子会議室は、メンバーが意見、質問、回答等をランダムに書き込んでいき、「金魚の糞」式に延々と発言が蓄積していくものです。それを通読するだけでも貴重な情報を入手することが出来ますが、慣れたら積極的に議論に参加すれば交流も深まります。発言の書込み操作は、電子メールの送信とほぼ同じイメージです。ちなみに、私のように読むばかりで一切発言しない利用者のことを皮肉って「ROM」(ロム。リード・オンリー・メンバー。CD-ROMをもっている)と呼びます。あなたの職場にいませんか?。会議になるとロムになる人。

他に電子会議の発展型としてリアルタイム会議やOFFがあります。リアルタイム会議は、開催日時があらかじめ決められ、ナマ放送で行われる電子会議です。このようにリアルタイムでパソコン画面で会話することを「チャット」といいます。OFFは「オンライン」に対する「オフライン」。メンバーが実際に集まって交流する企画で、フォーラム単位で随時企画されています。

データライブラリは各種データの格納庫で、ほとんどのフォーラムが持っています。過去の電子会議のダイジェストやメンバーが作成したデータベース、オンライン・ソフト(フリーソフトやシェアウェア。第3回参照)などが収録されており、そのフォーラムの加入者なら自由に自分のコンピュータに取込むことが出来ます(データを取込むことを「ダウンロード」といい、手順は通信ソフトによって異なります)。収録ソフトやデータは、ネット管理者によって厳しくチェックされているので、ウィルス感染の心配もなく安心です。私もオンライン・ソフト欲しさに色んなフォーラムに加入しました。このように、手当たり次第にフォーラムを物色して歩く利用者のことを「RAM」(ラム。ランダム・アクセス・メンバー。コンピュータ部品のRAMドライブをもっている)と呼びます。

一度覗いたきり二度とアクセスしないフォーラムに入りっぱなしのままでも、利用料金には関係ないし、フォーラム側からのアクションもありません。実害は全くないので精々RAMしましょう。

私的にフォーラムを開設する手段として、ホームパーティー(HP)という機能も用意されています。NIFTY-Serve 加入者なら誰でも開くことができます。開設者がパスワードを設定し、それを知っている人だけがアクセスできる仕組みになっています。

### (3) データベース、他ネット接続サービス

図書館といえば何ととってもオンライン・データベース。インターネットが流行る以前から、パソコン界ではネット間の相互乗り入れを追求していました。お馴染みのところでは「国会図書館書誌情報」や「日販書誌情報」、「LC MARC」に「Books in print」、日外アソシエーツの「ASSIST 人物情報」や各種新聞記事データベースなど。他ネットのため利用には当然追加料金がかかりますが、ラインナップが相当豊富なのでいざという時重宝します。

### (4) その他

オンラインで買物が出来るオンライン・ショッピング、天気予報や占い等のコーナー、観光・宿泊情報、翻訳サービス等、数え挙げればキリがありません。見落としがないか、

数ある「NIFTY本」やパソコン雑誌をめぐって情報収集に努めましょう。隔月で送られてくる小冊子「SEE YOU ONLINE」にもマル得情報がわかりやすく紹介されています。

#### (5) ログ管理

ログ(log)とは通信記録のことです。大抵の通信ソフトでは、接続中に画面に表示された文字データはすべて自動的にログ・ファイルに保存しておいてくれます。これをワープロやエディターに読み込めば更に用途は広がります。この「京都支部報」も、そうやって原稿をやり取りして編集されているわけです。

#### (6) インターネット

普通、一般家庭からインターネットに入るには、プロバイダと呼ばれる接続業者と契約する必要があります。しかし、NIFTY-Serve はプロバイダ事業も行なっているので、同じIDでインターネット接続権が得られます(今やインターネット接続サービスも、パソコンネットの重要なセールスポイントです)。一般のプロバイダ料金は、年間数千円～1万数千円というところですが、NIFTY-Serve なら基本料金でアクセスできます(すなわち通常回線で月額200円接続1分当り8円)。

家庭からインターネットに入る場合、プロバイダ選びがポイントとなります。安いからといってヘタなプロバイダを選ぶと、在宅時間帯(概して夜間)には回線が混んでいて全くつながらない、という憂き目を見ます(そうですねえ?むかし日本の都があつた某地方都市の■都Inetさん?)。じっくりプロバイダ選びをしている間のつなぎに、NIFTYのIDでアクセスするのが最もエコノミーです(それで不自由を感じなければなお良い)。

インターネット接続には、パソコン接続とは別のブラウザといわれるソフト(インターネット上のデータを見るためのソフト)が必要です。ブラウザは「Netscape Navigator」が今のところ最も使い易くポピュラーですが、最近ではフリーの「Internet Explorer」もだんだん幅を利かせてきました。「Netscape～」は本屋やパソコンショップで売っていますし、NIFTY-Serve 上でも提供されており、4千円でダウンロードできます。

さて、最終回の標語

**百聞は一見にしかず、百見は一触にしかず。**

つべこべ言ってもしょうがありません。それでおマンマ食っているプロとして図書館で働いているなら、パソコンぐらい自分で買って触ってみるのは当然のことではないでしょうか。「プロ」と称する人は、自分が使う道具(ツール)は自分で選ぶものです。他ならぬ将来の自分への投資に、一念発起されることを心から応援します。

延々と4回続いた本連載も今日が最終回。お名残り惜しいですねえ。名残ついでに私事で全く恐縮ですが、9月の配転で私も図書館を後にしました。今は総務経理課というところにおいて毎日お金を勘定しています。お金は本ほどはかさばりませんが、扱いは中々大変そうで、ただ今「丁稚奉公」中といったところですか。もともと狭い職場なのでそんなに違和感はないですが、図書館にいた時と違うのは、朝来たら机の上が綺麗に片付いていることぐらいでしょうか。

そんなわけで、しばらくは支部報編集のアフターケアをしたり、影でゴソゴソしているかもしれませんが、表向きは大図研の現役生活とはお別れです。会員はやめませんが、でも残念ですねえ。「青春18切符」で全国大会に行けないのが。

今までお付き合い下さった皆さん、有難うございました。狭い大学業界、またどこかでお会いしましょう。

◆最後の最後にお楽しみプレゼント◆

第1回にお約束した通り、本講座はお楽しみプレゼント付きです。本講座の感想を電子メールでお寄せ頂いた方に、そのお返事として「そのまま使える楽しいフェイスマーク集」をもれなく(1)お送りします。締切期限は特にありません。フェイスマークとはパソコン通信上で喜怒哀楽を表現する為に、記号や文字を図形的に使う人の顔などを表したものです(ほら、右下にもあるでしょう)。ワープロ等に単語登録し、ご活用下さい。

本講座に関するご意見は NIFTY-Serve:PXK01651まで。 \ (´o`) /  
(こばやし・ともみち/京都橘女子大学図書館)

..... (次頁より) .....

実際、貴重な夏休みの1日をタグ付けに費やしてしまいました。それでも「これがHTML化された私の論文だ！」というものにはほどとおいものしかできませんでしたが。

「もう非人間的作業は我がコンピュータ生活においては無いだろう」と”タグ”をくくっていたのに、なんでいまさら”タグ”を覚えにやなんのかいな。というところに陥っています。

救いの道はオブジェクト指向のHTML作成エディタを使用することにあります。これが個人で購入するには高額なものしかありません。

シェアウェアで見つけたものの、もうひとつ痒い所に手が届かないというものでした。タグをフルサポートして3万円以下のMacintosh版のエディタってないものでしょうか。

もっとも、画面上の表現がうまくなくても、これまで身についた「まわりくどい話し方」はそのままだ「まわりくどい書き方」に繋がっているもの、これはエディタでは直しようがありません。

さらに、他人に読んでもらうような内容にこれまた自信がありません。

いかんともしがたい。編集子から「こちらの方をなんとかせよ。」という暖かいご指導があるかもしれません。(´0`)

次は、附属図書館の受入掛長の水野孝夫さんです。なんせ「大図研京都」のメンバーすらわからない。喫煙コーナーでたむろしていて、「水野さんって大図研の会員ですかあ」「そうやけど、会費会員やで」「そしたら私と同じやないですか」

「会報の数珠繋ぎってコーナー知ってますか」「何やそれは」「おお！私と同じやないですか、絶対資格ありますわ」「なんの話や」

さて、硬軟どっちに転がるか、期待いたしております。

※ 電子メールで送られてきたままの雰囲気や行末位置を変更した以外は原文のまま掲載しました(編集部注)。

●-●-●●●-●●-●-●●●-●-●●-●●●●-●-●●-●-●●●●-●  
| 衝撃の新コーナー!!

● 大図研京都数珠つなぎ 第9回

京都大学附属図書館  
情報サービス課

小川晋平 さん

大久保さん（京工繊大）から突然のご指名をうけ、なにがなんだかわからないうちにこのコーナーの当番に当たってしまいました。

第7回の松島さんは「すてきな先輩からの指名」とありますが、私にしてみると「指名料」ぐらいつけたれや！（ちゃんと覚えといてね大久保さん（\_-/\_）という感じです。

私の図書館歴は、京大医図4年余、滋賀医大附図に13年余、その後京大附図1年半、また滋賀医大3年、そしてまた、この4月から再び京大に転任しています。

もう、20年も図書館員やとるわけですが、「私は、これをやってきたぞ！」と誇れるものは、はっきりいってありません。

テクニックに限っていえば、最盛期には1分間320ストロークのタイピングが可能だったという事でしょうか。分速300ストロークを越えるとミスタッチが10数%出現しました。

キーボード練習用ソフトで計測したのですが、250ストロークあたりですと入力誤りがなくなりますから、結局300ストロークオーバーのタイピングは、他人を驚かすため以外には使い道がなかったわけです。

このキー入力の早さは、今日の電子時代においては、老いたりといえども非常にありがたいものです。

思いつくままに文章が打てる。これは電子メールで文章を、あまり時間をかけずにさっさと作れる。ということが可能にしてくれます。

もっとも論文系の文章はダメですが、話言葉で文章が書けるという強み。一步誤るとわかりにくい文章の見本のようになってしまいますが。

ということは、いかに日常においていい加減な内容で、いい加減な単語の羅列で話しているかということなのですが。

理路整然とした話をされる方もいますが、私はどうても真似できません。

そういう方は、電子メールといえども一端紙に「下書き」をしてという手数をかけるので、送られてきたときには、すでにその話題は過去のものという笑い話のような事になりやすいのです。

反対に、いつもの調子でペラペ書いていたものが、いつのまにか紙形式となって流布されていた。という冷や汗（'\_;;; ものの経験をつんできてはいますが。

ですから、電子メールなんぞは、絶対に「印刷」して読んではいけないものだと自主規制しているわけです。紙媒体に「印刷」したとたん、それはまったく別の顔をしたものになってしまうと思うからです。

あくまで、ディスプレイ上において、スクロールされていく情報として取り扱うべきものではないかと思うのです。

ところが、最近流行のWWWにおけるホームページに代表されるHTML文章は、宣伝・広告・広報といったものから、研究発表の場としての論文や文学としての小説へとその適応範囲が広げられようとしているようです。

ちょっと、実験ページを立ち上げるからやってみないか。という「悪魔の誘い」にひよこひよこのってしまったのですが、タグ付けによるHTML化では、タグ付け作業でその精力をつかいはたしてしまいました。（!\_!）  
（☞前頁へ続く）